

皮膚科医に必要な使命感と公共心について考える

キャリア支援委員会

多田弥生¹ 伊藤明子² 東 裕子³ 加藤則人⁴ 菊地克子⁵
 高山かおる⁶ 中島喜美子⁷ 松村由美⁸ 青山裕美⁹ 秀 道広¹⁰

はじめに

2014年6月より旧「皮膚科の女性医師を考える会」は日本皮膚科学会「キャリア支援委員会」と改まり、現在3年目を迎えた。本委員会の目標は、男女を問わず、1) 皮膚科学における指導的役割を担う人材の育成、2) 皮膚科勤務医の就労の継続および再開の支援、3) 皮膚科医の使命感と公共心の涵養、である。現在キャリア支援委員会が主体となって行っている主要3企画は、いずれもこの目標達成を目指して立ち上がった企画ばかりであるので、紙面を借りて、少しご紹介したい。

1) 総会および各支部総会にあわせて開催される委員会主催の企画

旧「皮膚科の女性医師を考える会」から引き続き行っている。総会企画はここ数年、皮膚科領域で長く活躍されている先生のご講演と、会場の参加者を巻き込むdiscussion形式となっている。各支部総会においてはこれに加えて、メンター&メンティーの会が行われている。これら両企画は私的な事情も含めて働き続けることを困難と感じる、あるいはその先の目標が見えにくくなっている医師が、それを乗り越えた経験があるかもしれない先輩の話や聞く、あるいは、相談する機会を得てもらうという企画である。さらには、使命感および公共心をもって皮膚科領域で活躍している先輩方の話を聞くことで、自身の働き方について考える機

会を持ってもらうことを意図している。

2) 皮膚科リーダー養成ワークショップ

今年で3回目となるワークショップである。本委員会の目標の一つ、皮膚科学における指導的役割を担う人材の育成が、総会や支部総会の企画だけでは不十分かもしれないという発想からスタートしている。2016年からは女性のみならず、男性にも参加してもらっており、参加者は専門医取得前後の大学や病院の責任者、およびキャリア支援委員会の委員により推薦された、組織の期待を背負った皮膚科医である。将来、皮膚科診療を支えるリーダーがこのワークショップから多数輩出されることを願いつつ、委員一同企画を練っており、年々企画構成が進化している。

3) 皮膚科サマースクール

皮膚科に興味を持っている学生、研修医により深く皮膚科を理解してもらいたいという企画である。皮膚科の知識、技能のエッセンスとともに、皮膚科医の担う役割のすばらしさを、将来皮膚科に行かないかもしれない人をも対象として学んで頂くという点が委員会の目標と合致している。今年は応募人数を超える応募があり、学生や若手医師の皮膚科に対する興味の高さがうかがわれた。こちら、参加者からのアンケート結果を受けて、年々内容が進化していくものと思われる。

このように、旧「皮膚科の女性医師を考える会」は主に女性医師問題に重点をおいた活動であったが、キャリア委員会発足後は男性医師も含めた視点での活動に軸足を移してきている。

さて、キャリア支援委員会で主催する総会企画第2弾として、第115回日本皮膚科学会総会では、「この人のキャリアが聞きたい」を開催した。今回は、キャリア支援委員会の掲げる目標のうち、人材育成と皮膚科医の使命感と公共心の涵養に主に焦点を当てた。皮膚科診療が実際の診療と人材育成を通してどれだけ幅広

- 1) 帝京大学
- 2) 新潟大学
- 3) 鹿児島大学
- 4) 京都府立医科大学
- 5) 東北大学
- 6) 済生会川口総合病院
- 7) 高知大学
- 8) 京都大学
- 9) 川崎医科大学附属川崎病院・キャリア支援委員会副委員長
- 10) 広島大学・キャリア支援委員会委員長

く、社会貢献につながるかという実例を、皮膚外科、接触皮膚炎、フットケアの分野でみることで、皮膚科医に必要な使命感と公共心を考えた。皮膚外科の分野からは虎の門病院の大原國章先生にご講演を賜った。皮膚外科を独学で学び、極め、国内外で多くの人材を育成した人生についての講演を伺った。また、後半は新潟大学の伊藤明子委員、済生会川口総合病院の高山かおる委員に、それぞれの先生がライフワークとされている接触皮膚炎、フットケアを通してやってきた社会貢献のお話を聞いた。最後は、皮膚科医の教育、使命、持つべき公共心について、聴講者も参加して考えた。

Session 1 : この人のキャリアが聞きたい!

大原國章と皮膚外科

講演者 虎の門病院 大原國章

皮膚科の領域のなかで、わざわざ皮膚外科を選んだ理由はいくつかあるが、積極的理由の第一としては治療結果が目に見えることであり、他人があまりやっていない領域をやりたい（これは、手っ取り早く一人前になれるというよこしまな野望もあり）などで、消去法的理由としては、他の外科では下積みが長い、ぐにゃぐにゃして生暖かい腸管は触りたくない、と言った不埒な考えもあった。実際に始めてみると扱う領域・疾患は幅広く、良性・悪性腫瘍、母斑、血管腫、熱傷、慢性炎症、はては深在性真菌症まで多岐にわたって、腕の振るい甲斐があった。とはいうものの皮膚外科の地位は低く、メラノサイト、メラニンなどの基礎研究は評価されても、メラノーマの患者をいくら手術しても英文論文が書けるわけではなかった。だがそれゆえにこそ、実績で見返してやるという闘志が持続したのである。手技の習得に関しては、皮膚外科が盛んでなかったがゆえに他科との共同手術が多く、その分だけ他流試合を重ね、色々な考え方や技術を見聞することができた。医局費で、それまで皆無であった手術の教本を買い揃えてもらったことも大きい。また時代的に多少の冒険の許されたこともあり、本を読んだだけで、学会で聞いただけの、初手術にも果敢に挑むことができた。レーザーや筋弁の手術に取り組んだのも、皮膚科としては先鞭をつけたと自負している。しかしそうはいってもすまじきものは宮仕え、大学の講師の役職に就けていただいたとはいうものの、100%が自分の思い通りには運びようがない。鶏口牛後のたとえ通

り、転出の御声かかりには二つ返事で承諾、市中病院に部長として転出した。それまでの虎の門病院では年間に全麻手術が4件、しかも形成外科に依頼という未開地であり、手術室には皮膚科の市民権はなかった。しかし、実績を重ねるうちに院内の評価も上がり、学会発表や論文執筆で対外宣伝に努めた効果もあり、通算で国内の23大学からの研修医師を受け入れるまでになった。また、台湾、韓国、タイ、中国、インドネシアからも研修医師が次々と訪れてきた。

つらつら思うに、皮膚科はお人好しであり、膠原病やアレルギー疾患は内科、手術は形成外科、熱傷は救急部や形成外科、(血管腫も小児科)に唯々諾々と浸食されるままに身をゆだねてきた。今こそ、反撃に向かわねばならず、皮膚外科はその先兵になり得る。大学の教授たちは皮膚外科は大事だと、今さらながら口にはしているが、その実態は入院稼働率を維持するため、収益や人員を確保するのが目的であって、患者治療を目指しているとは思えない。そんな口車には乗らず、患者の幸せのために外科治療を広めるのが私の願いである。そして、自分がこれまでに得た経験、学んだ知識を後学の若手に伝え、残すことも使命と考えている。

Session 2 : マイライフワーク

1) 接触皮膚炎診療～15分で習得するパッチテストのコツと最新情報～

講演者 新潟大学 伊藤明子

接触皮膚炎の魅力は何か? 目の前の患者さんの皮膚炎の原因を突き止めることで、間接的にたくさんの人をcureできる点である。パッチテストによる塩化ビニル手袋の原因成分の究明をきっかけに日本で大きな販売シェアをもつ企業とともに塩化ビニル手袋の製品改良を行った事例を紹介した。EU諸国ではパッチテストの疫学データは国民の健康を守るために活用される。ニッケルはEUでも問題となっているアレルゲンであるが、肌に長時間触れる、または繰り返し肌に触れる金属製品中のニッケル含有量や溶出するニッケル量が制限され、対象製品やニッケルの制限量なども時代に即して改訂されてきた。日本でもニッケルのパッチテスト陽性率は高いが、残念ながらパッチテストの疫学データが国民の健康を守るためには活用されたことはまだない。こうした思いを抱きながら、昨年、専門委員として参加した消費者庁の「消費者安全法第23条第1項の規定に基づく事故等原因調査：毛染めによ

る皮膚障害」の調査結果から、対策として消費者、企業へどのような提言を行ったのか、皮膚科医は何をすべきなのかについて解説した。また皮膚科医として習得すべきパッチテストのコツとして、ジャパニーズスタンダードアレルゲンの重要性と昨年発売されたパッチテストパネル® (S) の利点と問題点、注意点について紹介した。皮膚科医には個々の患者の皮膚炎の原因を確定し、企業に情報を提供して製品の安全性を高める責務がある。皮膚科医と行政の連携も重要であり、皮膚科のリーダー達には「接触皮膚炎診療の重要性」を認識してほしい。サブスペシャリティを持って、更に仕事を発展させるための環境整備や新しい取り組みなど、組織のトップでなければできないことがたくさんある。私自身はこれまで日々勤務医を続けることに精一杯で、長期的な目標を持たず、キャリアを意識せずに過ごしてきたことに悔いがある。若い医師には、後に後悔しないためにも今から未来の自分を思い描いて過ごして欲しいと思う。

2) フットケア

講演者 済生会川口総合病院 高山かおる

フットケアという分野は皮膚科では決してよく知られた分野ではないが、もともとは糖尿病性壊疽を治療、予防するという目的に始まっている。現在他分野の医師や看護師、コメディカル、義肢装具士などと連携してフットケア外来やチームがつくられ病院単位での診療が行われているが、チーム立ち上げにかかわった春日部の秀和総合病院では皮膚科が窓口となりフットケア外来が成果を上げている。下肢救済学会とフットケア学会が行った調査によるとフォンテイン分類の4度になったときに始めに訪れる科は皮膚科であるというデータがあり、この分野で果たすべき皮膚科医の役割は大きい。また、足や爪の皮膚疾患が下肢機能を弱め、転倒を起こす理由になっているというデータがあり、今後迎える超高齢化社会における足の病気の予防の重要性を予見させる。転倒は要介護4度（寝たきり）状態になる理由の4位にランキングされており無視できない問題である。落ちた下肢機能は、爪を適切にととのえる処置などで改善することもわかっており、足のケアは実は機能回復をもたらすという意味も持つ。とはいえ足の機能が重要であることはわかっているが、なかなか社会にその重要性が伝わらないため、同じように考えている先生方や他業種の方を集めて一般社団法人「足育研究会」を立ち上げ、現在社会に足を考

えていただくためのさまざまな活動を行っている。

なぜこの分野に邁進できるかと自身の皮膚科医としての‘育ち’を振り返ってみると、その基礎は研修時代にある。皮膚の変化には必ず理由があり、それが治らないということは解決できていない問題があるということだと教えられてきた。普段の診療からそのような目で皮膚疾患を診てきたことが、疾患への理解を深め、どうすればよいのかという解決策を考える癖はぐくんだ。足の皮膚の変化の診方にはまさしくこの癖が役に立った。若いうちの研修は大変で辛いことも多いが、コツコツと実力を積み上げていくことが大切だと思う

Session 3 : 総合討論

皮膚科医に必要な使命感と公共心について考える

3つの講演の後、主に会場からの質問に演者の先生方が答える形で討論会が行われたので、その内容をQ&A方式で以下にまとめて示す。

Q: (公共心ということであれば) 皮膚科から政治に訴えかける手段として、どんなものがありうるか。

A: 例えば、接触皮膚炎の立場からであれば、接触皮膚炎はその予防や診断において、行政、企業と連携していくことが重要。行政にその重要性を訴えかけるためには、皮膚科の世界でリーダーの立場にいる、教授クラスの先生に接触皮膚炎に興味をもってもらい、活動して頂きたいと考える。

Q: 若手皮膚科医の教育について；教えたいと思う若手とそういう気持ちになれない若手がいるように思われる。「この人になら教えてあげよう」と思われる若手になるためには、指導者からはどのようなアドバイスを送るか？

A: 自分が教わる時に何も勉強せずに、ただ、教えてくれ、というのはだめで、ちゃんと自分ならこうする、という意見をもって教わりに行かないといけない。自分はいつも誰かに質問をするときは、自分で勉強して答えをいくつか考えてから尋ねていた。やる気のある人、興味をもって根気強くついてくる、なついて聞いてくる人には教えたいと思うものだ。最近はどうしてもっと聞いてこないのだろうと思ってしまう。こちらは分け隔てなく指導するよう心がけているが、聞いてこないとそのままになってしまい、残念だ。また、医師からだけではなく、コメディカルから教わることも多いはずである。職種が違っていても、理屈が通っ

ていれば、お互いに理解できるので、お互いに教えたり、教わったりが可能である。そういう意味で、普段から職種を越えて意見交換をしておくことも重要である。

Q：サブスペシャリティに目覚めるきっかけとしてはどんなものがあったか？目覚めるのに年齢制限はあるか？

A：上司の存在、医局の命令などがあったが、結果的にはよかった。面白いと思ったことが結果的にはサブスペシャリティにつながった。意欲があれば、何歳になっても学ぶのに遅いということはないと思う。

Q：少し患者に冷たいのではないかと、と思われるような診療を展開する若手が増えてきている印象である。患者の立場にたった診療の提供をどのように後輩に指導するべきだろうか。

A：医学生や若い医師の段階で、『人』としての教育が必要と感じる場面がある。同時に、個人の性質によるところも大きいので、言ってもしょうがない人には言わない。指導することで改善できる医師には頻繁に指導するし、育てようとこちらも努力する。皮膚科医としての責任を全うすべき、ということを経験する形になるが、ときに自分が当該患者を代わりにみることになるのはしょうがない。また、責任ある診療を行え

る皮膚科医が育つように、我々を含めたシニアの皮膚科医もふだんの診療態度に留意すべきだと感じる。

さいごに

今回の総会企画は皮膚科医に必要な使命感と公共心に焦点を特にあてた構成で、企画終了後のアンケートでは「演者3名の選定が素晴らしかった」とのお褒めの言葉を多く頂いた。逆に演者の魅力に頼った企画であったかもしれないが、討論会のやりとりも、大変興味深く、委員も聞き入ってしまった。終了後のアンケートで「立ち寄っただけだったが、知識も増えたし人生を考えるきっかけになった」との感想を頂いたが、全く同感であった。使命感や公共心といったものの場合、万人共通の正解というものはないわけだが、皮膚科医一人一人がそれに近い目的をもって邁進することは、ひいては、皮膚疾患を有する患者への質の高い診療という形でfeedbackされ、皮膚科医としての公共に寄与する使命を達成することになるのだろうと考える。そうした事を考えるこの企画において、素晴らしいご講演をしてくださった先生方、および、会場に立ち寄ってくださった先生方に、心より御礼申し上げます。

写真 当日の総合討論の様子

